

加賀藩校から近代学校へ —近代黎明期の「金沢中学校」の教育を担った教師は誰か—

An Examination of the Continuity of Educational Practices from the Kaga Domain to Modern Japan
—Focusing on the Significant Contributions of Teachers at Kanazawa Middle School
under the Old System of Education—

井 上 好 人 (人間科学部こども学科教授)

Yoshito INOUE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

旧加賀藩は、明治維新後、近代的な中等教育を目指しその萌芽的な役割を担ったとはいえ、その後の制度的な展開に影響力を保持したわけではなかった。教育政策のゆらぎと教則の試行錯誤が重なり、仏学や英学などの私塾や変則学校が幾度も勃興し、あるいは改編を繰り返しながら、制度としての中等教育機関の整備は石川県庁に委ねられていく。小論は、近世から近代への黎明期における教育の連続／不連続の問題を、制度ではなく学校で教鞭をとった教師の系譜と移動(mobility)に着目した。『金沢市教育史稿』に掲載されている金沢中学校の教師10名の経歴を旧身分と移動の特徴から捉え、近世教育の伝統と成果がどのように近代教育へ引き継がれていったのかについて考察した。その結果、彼らの出身地がいずれも金沢でありしかも下級武士の出身である、という特徴を析出した。

〈キーワード〉

旧加賀藩、藩校、近代学校、金沢中学校、教師、教育制度の連続／不連続

1 問題の所在

旧加賀藩は、明治維新後、近代的な中等教育を目指しその萌芽的な役割を担ったとはいえ、その後の制度的な展開に影響力を保持したわけではなかった。教育政策のゆらぎと教則の試行錯誤が重なり、仏学や英学などの私塾や変則学校が幾度も勃興し、あるいは改編を繰り返しながら、制度としての中等教育機関の整備は石川県庁に委ねられていく。この歴史の断層に、人材養成の制度的な不連続をみるのは容易である。しかし小論では、制度というよりもむしろ学校で教鞭をとった教師たちの系譜と移動に着目して、教育史の連続／不連続の問題に言及してみたい。

ところで、明治維新後の石川県の中等教育を考える場合、旧加賀藩の藩校との制度的な連続性や前田家を筆頭とする武士団との関係性はどうか、という問いがある。結論からいえば、制度的な関係性は薄くその意味で不連続ではある。だが、金沢の教育文化の「伝統」がどう影響していたのかという問題は、これまでの教育史で等閑視されてきたように思われる。加賀藩は「天下の書府」^①と称えられる学問の伝統があり、能や茶の湯をはじめとした文化の奨励や御細工所にみられる工芸技術の継承に熱心

な藩であったと謂われる。そうした加賀藩の「文化と学問の意義を認めそれらを次代へ継承していくことを推奨する慣習と制度」をここで「伝統」と呼ぶならば、そうした「伝統」は、近代教育にどのように継承されていたのだろうか。小論においては、石川県の教育・文化の継承を担った「人材」の選抜と移動(mobility)に着目して加賀藩の「伝統」を検証しておきたいと考える。

この視点からの優れた論考として本康(2004)がある。同論は、藩政期末の金沢における科学技術の導入とその蓄積の過程を人材交流の視点から分析したものである。有為な人材の外部から招聘と藩校教育との関係が明らかにされ、さらに、武士身分の周縁的な層に位置づく藩士たちが民間の学者や技術者と共に形成していた地域横断的な文化的ネットワークを析出し、その意義を考察している。

小論は「学校」に注目する。すなわち、加賀藩の藩校の後を継ぐ「中学東校」と「中学西校」を契機として、廃藩置県後の1871(明治4)年に「金沢県」によって設立された初の県立の中等教育機関＝「金沢中学校」である。そうして、藩校が明治維新を機に中等教育を担う近代学校へ転換されていった制度的変遷を概観しつつ、金沢中学

校で教鞭をとった教師10名の出身背景と社会移動（social mobility）の様相を捉えようとする。そのことで「教師」という人的資源が担った「伝統」の近世から近代への連続／不連続の問題に言及したい。

さて、藩校を近代的な学校へ脱皮させようとする動きは、加賀藩の場合早かった。1870(明治3)年、金沢藩²⁾は、文学学校であった藩校「明倫堂」と「経武館」を引き継いで皇学および漢学を講じる「中学西校」を、洋式武学校であった藩校「壮猶館」（後、英書翻訳方を「致遠館」として独立）を引き継いで洋学を講じる「中学東校」を、それぞれ開校している。

この動きは、1868(明治元)年の「藩治職制」によって「藩立学校という公的な性格を持つようになった」(神辺1988)ことの加賀藩なりの答えであるとともに、教授形態を經典を中心とした素読や講釈のような伝統的な教授法から分離し、近代的な教育理念を具現化する「学校」として歩みだす契機となった³⁾。

そして、廃藩置県後の1871(明治4)年11月、「金沢県」はこれらの両校を統合し、初の“県立”の「金沢中学校」を発足させた⁴⁾。校舎は金沢西校を引き継ぎ、教則については小学科（初等）から中学科（中等）までの普通教育と専門教育を施す総合学校ともいうべき構想をもっていた。例えば、「普通學」の「正則中學」課程をみると、洋書を用いた「文章」、「歴史」、「地理」、「理化」に加え、「数学」と「史学」が和文のテキストで講じられ、これを修めた後に「専門學」に進むことになっていた。修了のための等級制（「正則中學」の場合、二等級）と試験法（試験結果を「上等、中等、下等」で評価し「上等」のみが進級できる）が定められているように、教育課程の整備と運用に関して欧米流の近代的な制度が導入されようとしていたことがわかる。

開校式で金沢県大参事・内田政風（旧薩摩藩士）の行った告示には、同校が「三學（皇学、漢学、洋学のこと：引用者注）を合併し、更に普通専門の二科を立て、四民の子弟を教え、其財を為し其業を達し、異日國家の用に供せん」⁵⁾とするねらいが標榜されている。生徒数は、小学科・中学科あわせて500人ばかりが集まり、その半数は寄宿生であった。また、年少で学力優秀な者を「異等生」として選抜し学費を支給し、さらに最も優秀な者3人を東京へ留学させている。これが県の公費留学生の嚆矢であった。その中の一人が中田敬義（1858年生。外務官僚）である。

しかし、1872(明治5)年2月、金沢県は「石川県」となり、県庁が石川郡美川町に移されたことで、石川県は同校をわずか半年で廃校にしている。（「從來舊金澤藩設置の學校を悉く閉鎖するの命ありしかば、本校も亦閉校の已むを得ざるに至れり」(『金沢市教育史稿』258頁)。おそらく、

1872(明治5)年の「学制」頒布に伴って出された「從來ノ府県学校ヲ廢シ更ニ学制ニ從ヒ設立ノ事」(文部省布達第十三号)に先立って石川県が判断した処置だろう。この布達によってそれまで府県ごとに設けられていた学校が「一旦悉令廃止」させることとなった。

ここまでが旧加賀藩の藩校が中等教育を担う「学校」へ転換されていった制度的経過である。

この転換は、設置者が藩から県に変更になり、教則とその制度運用も欧米流の近代的な流儀を模倣しようする試行錯誤の過程であった。この最初の転換期に立ち会い、新しい「学校」で教授を担った人材はどのような人々だったのだろうか。「天下の書府」(新井白石)と称えられた藩政期・金沢の教養文化の担い手は、近代教育の黎明期をどう支えたのか／あるいは支えなかったのか、を問うてみたいのである。小論では、藩政期に出生し、学問の手ほどきを受けあるいは遊学し、様々な交際圏に関与しながら明治維新を迎えた世代の「人材」＝教師の系譜を「移動(mobility)」の観点から辿ることで、藩政期の教育と近代学校との連続／不連続の問題を考えてみたい。

2 金沢中学校の教師「10名」

金沢中学校で教鞭をとった教師は、中学西校から移った者が多いとされる。その職制は「二等教師一人、三等教師三人、四等教師四人、五等教師五人、訓導五人、訓導加以下にして、教授に従事せしもの殆三十人」(『金沢市教育史稿』263頁)とあるが、個人名として記録されているのは次の10名である。「漢學には藩士井口濟、藤田維正、永山平太、河波有道、豊島毅、洋學には藩士石坂専之介、中山眞一、近藤斤四郎、數學には藩士関口開、石田古周ありき」(『金沢市教育史稿』258頁)、と。「10名」のそれぞれがどの職階であったのか不明であるし、またそれ以外の助教や訓導についても判然としないが、少なくともこの「10名」が金沢中学校で重要な役割を果たしたことは間違いない。そこで彼らの経歴を表1で整理し、身分的な位置と主に地理的な「移動」の様相から相互に通底する特徴を捉えてみよう。

すると、教師「10名」について次の特徴が析出されるだろう。

第一に、加賀藩武士の家系ではあるが、いずれも下級武士で武家社会の周縁的な身分層であることである。具体的には、「与力」や「御歩(徒士)」のような下級の実務役人、さらにその下の身分である「足輕」の身分層である。また、「陪臣」(藩主・前田家に仕える“直参”ではなく、“家來の家臣”。)や世代を遡ると武家ではなく医家に連なる身分の者もいる⁶⁾。

第二に、藩政期に江戸や大阪への遊学経験を有している

表 1 金沢中学校の教師「10名」

名前	生年／出身 ／身分	学問	移動パターン	経歴
井口嘉一郎 (済)	1812年 金沢 足軽	漢学	地元 →遊学 →Uターン	代々の足軽身分（「持筒足軽」）で井口在屋の父である。（在屋は、「あのかち式渦巻ポンプ」の開発で有名な機械工学の先達で、帝国大学教授、工学博士。）済は足軽身分ながら儒者を志し、昌平坂学問所の儒官である安井息軒の学僕を務めた。その後、浜松藩の藩校「誠堂館」の儒官を経て帰沢し、加賀八家・横山家の儒官となった。明治維新の際に加賀藩士に取り立てられ、金沢中学校の教師、後、石川県専門学校でも教鞭をとっている。
藤田維正 (容齋)	不明 金沢 陪臣	漢学	地元 →遊学 →Uターン	祖父の代に加賀八家である長家の家臣に取り立てられた家系である。21歳の時、「大阪に遊び藤澤東畎に学び、傍ら奥野小山、選選齋等と交り」、帰沢して松風社という文学サークルを組織している。「金府の文学茲に至り蔚然として與る」（『金沢市教育史稿』603頁。）長州征伐に従軍後、1868（明治元）年、明倫堂の文学教師。金沢中学校の教師だけでなく、その後も、石川県の諸学校で教師を務めている。
永山平太 (亥軒)	1815年 金沢 御歩	漢学	地元 →遊学 →Uターン	「定番御歩（徒士）」の家に生まれ足軽の家へ養子に出された後、儒学で身を立てた。（「御歩」とは加賀藩の職制で「御目見得以下」の徒士を指す。）明倫堂で学び、昌平坂学問所に遊学経験のある儒学者である。金沢中学校の教師、後、石川県師範学校でも教鞭をとっている。
河波有道	1822年 金沢 陪臣	漢学	地元 →遊学 →Uターン	家老・本多家の家臣として書物取調係を司る家の出身である。明倫堂で学び、1858（安政5）年、江戸で村田蔵六（大村益次郎）の塾で蘭学を学んでいる。その後、帰沢して明倫堂の助教を務めた。明治維新後は本多町で私塾「梅塢塾」を開き「漢學佛學習字理學算術」を教授しつつ、中学西校や金沢中学校の教師となっている。また、「鯨志を読み捕鯨の志を抱く」（日本常民文化研究所編、1955、『日本漁民事績略』、日本常民研究所）とあるように、捕鯨器械や捕鯨法を研究し加賀捕鯨の嚆矢となった人物でもある。
豊島毅 (洞齋)	1821年 金沢 与力	漢学	地元 →遊学 →Uターン	父は加賀藩の与力。藩校明倫堂に学んだ後、江戸に出て松平氏の麴溪書院に学び、幕府儒者・杉原氏の塾頭となる。1858（安政5）年藩主の命で帰沢し、御歩に取り立てられ明倫堂の教師となった。1863（文久3）年尊王論をとらえて幽閉される。勤皇の大義と政教の改革を論じた。県庁の文教職を辞して上京し、1880（明治13）年、岩倉具視が谷干城らとはかって創設した「斯文学会」に尽力した。
石坂専之介	1849年 金沢 医師	洋学	地元 →遊学 →Uターン	父は新川郡の出身で金沢へ出て黒川良安に師事した医者である。（専之介は、上新川郡の豪農であった石坂家へ養子に出ている。）壮猶館で学んだ後、江戸へ遊学し、村田蔵六（大村益次郎）の塾、箕作麟祥の塾等で学び、1869（明治2）年、大学南校へ入学、慶応義塾の教授となったが、1872（明治5）年、帰沢して金沢中学校で教鞭をとっている。後に、県会議員、県会議長、富山県から衆議院議員として選出。
中山眞一	(不明) 金沢 (?) (不明)	洋学	地元 →遊学 →Uターン	中山眞一についての資料は少なく詳しい経歴は不明である。仏語を教授する「文学教師」として、近藤斤四郎と共に「東京より歸縣して金沢中學校文學教師を拝命」（『金沢市教育史稿』263頁）した。
近藤斤四郎	(不明) 金沢 与力	洋学	地元 →遊学 →Uターン	近藤斤四郎についての資料は少なく詳しい経歴は不明であるが、父と兄については判明している。父（信行、通称：兵作）は近藤信行（兵作）で「本組与力」、「最も財政に長ずる」とあり、加賀八家である長家の当主・長連弘の補佐役を務めた。学問として「關流の算學」を修め明倫堂の師範も務め、1868（明治元）年に関孝和編の『開法方翻変之法』の解説書を著すなど、和算の研究家でもあった（『加能郷土辞彙』325頁）。兄（信成、通称：岩五郎）は長崎留学中に薩摩藩士とトラブルを起こし責任をとって割腹している。斤四郎が金沢中学校へ招聘された経緯は、仏語を教授する「文学教師」として、中山眞一と共に「東京より歸縣して金沢中學校文學教師を拝命」（『金沢市教育史稿』263頁）した。

名前	生年／出身 ／身分	学問	移動パターン	経歴
関口開	1842年 金沢 陪臣	数学	地元	茨木家の家臣（陪臣）松原信吾の子で、定番御歩の関口家の養子となる。和算を初め実兄の松原匠作に学び、その後、藩の「数学師範算用者」である瀧川秀蔵に学んだ。関口が洋算に触れたのは戸倉伊八郎との出会いである。戸倉は長州人で、江戸の高島秋帆に砲術と兵学を習い私塾を開いていたところ、1862（文久2）年加賀藩に招かれ、壮猶館の数学教師になった。1869（明治2）年、「鉤深館」（測量を教授する学校）で教えている。「西洋算法の金澤に起こつたは、伊八郎を以て鼻祖とする」（『加能郷土辞彙』）。関口開は、西洋数学を修めるために英語の習得を目指したが良師に恵まれなかったために、「獨習して遂に英米の数学書を読み得るに至れり」（『金沢市教育史稿』518頁）。金沢中学校で教鞭をとった後、中学師範学校、石川県専門学校（現石川県立大学）の教師も務めている。
石田古周	（不明） 金沢（？） （不明）	数学	（不明）	履歴不明だが、1873（明治6）年と1874（明治7）年に、『算類新編』という洋算の解説書を村田則重と共著で出版している。校閲者として関口開を迎え、上下巻と付録から成る著作であり、表題に「官許」、「石川県学校蔵版」と付記されている。

ことである。幼い頃の教育を金沢の藩校（明倫堂や壮猶館など）や私塾で受け、学問で身を立てるべく江戸や大坂に遊学して研鑽を積んでいる者（井口、藤田、永山、河波、豊島、中山、近藤）が多数である。このうち、19世紀初めに生まれた世代（「先達世代」）（井口、藤田、永山、河波、豊島）は、遊学後、金沢に戻り藩校の儒官や教師を務めているし、19世紀半ばに生まれた若い世代（石坂）は、明治維新後の洋学教育（大学南校）を受けて金沢中学校へ招聘されている。近藤と中山の生年は不明であるが、近藤の兄の年齢から推測するに石坂と同じ19世紀半ば生まれであり、東京で洋学を学んでいた経験を見込まれて仏語教師として招聘されたことだろう。総じてこの移動パターンを「地元→遊学→Uターン招聘型」と記しておく⁷⁾。

ここで留意すべき点は、彼らのそうした江戸への遊学は、藩の留学制度として行われたものなのか、あるいは（許可の下ではあろうが）自らの志からの訪問や学問修業であったのか、ということである。前者の場合、加賀藩で藩費による留学が始められたのが1861（文久元）年、航海測量学研究のため幕府の軍艦操練所に派遣したことを嚆矢とするものである。『日本教育史資料 式』中の「旧加賀藩 石川県取調」によれば、「文久以前ニ在リテハ藩費ヲ以テ他國へ遊学セシムルカ如キ未タ嘗テ之アルヲ聞カス」とある。年長の井口、藤田、永山、河波、豊島については、その年齢を考慮すれば文久以前に江戸で学ぶ機会があったはずであるから、藩の制度下での留学ではないと推測される。年少の石坂、中山、近藤の遊学の経緯詳細は不明である。一方、参勤交代を利用して従者として江戸へ行く機会はどの世代においてもあっただろうから、その機会と伝手があったのかもしれない。

そうすると、たとえ参勤交代を利用した遊学であったとしても、彼らが一定程度の「放浪の学徒」たり得る自由と覚悟を保有していたことは、武家社会の周縁的な身分であったという構造的な要因に関係していたように思われるのである。加賀藩では——に限ったことではないだろうが——、立派な士分であるほど「封境ヲ守ルヲ以テ務メトナセシ戦國ノ餘習」（ルビ強調：引用者）は強く、反対に、周縁的な身分であった者ほどそうした束縛から比較的自由であった。さきの「石川県取調」では「陪臣等ハ文久以前ト雖私費ヲ以テ遊学セシハ舊記中往々之アリ」と、陪臣の私費遊学を士分の「務メ」とは異なる性格のものとしていることから窺える。（以上、引用箇所は『日本教育史資料 式』82頁。）

陪臣や与力のような専門的知識や技能をもって武家社会に生きる下級武士にとって、自らの家存続のため技能修得に励むことが「士分」とは異なる意味での「本分」だったのではない。この存続戦略は、親から子への血縁の連続性というよりも、能力の連続性を優先するのが特徴である。そのため、能力に秀でた弟子や係属を見つけ——もちろん同じ身分層であることが前提ではあるが——養子として迎え跡目を継がせる事例が慣行となっていた。当の（実子であっても、あるいは養子に迎えられる）本人にしても、「終身部屋住みに止り、碌々として世の下草」（徳富蘇峰）⁸⁾とならないように、幼い頃から学問に秀でていることを証明し、日々研鑽を積むエートを保持するように社会化されてきたことになる。このような心理特性を「達成の欲求（need achievement）」と言いかえるならば、この特性は当事者個人というよりも、社会的な動因として特定の身分層に遍く作用していたと考えられるのである。彼らにとって

“放浪の学徒”は、身分社会に十分包摂されない周縁的な生き方であったとしても、これが公に奉仕する合理的な選択であったからである。

さて、第三の特徴として、金沢中学校の廃校後も、教師として独自の学問を追究、深化させ、地元・金沢の教養文化や実学に関わるネットワークの中心となっていた教師（井口、藤田、永山、河波、関口、石田）が多いことがあげられる。（中山と近藤は「伝語」の文学教師であったことが不運で、その後の仏学から英学への転換の時代に彼らの足跡は辿れない。）

例えば、河波有道の場合、洋書で「鯨志」に触れ翻案しようとする野心を抱いたことが、漢学の素養を活かして洋学研究と実業分野へ裾野を広げるきっかけを与えた。彼の私塾が掲げた専門分野は「漢學佛學習字理學算術」と多岐にわたり、その後のユニークな発展が予感されている。そのとおり、彼の関心は実学へ向かい、徳光村（現：白山市徳光町）で捕鯨法と捕鯨器機の開発を地元の漁師たちと行い、加賀捕鯨の嚆矢となっている。

これらの教師に薫陶を受けた世代は、明治維新後、「先達世代」として最初期に高等教育を受けたとして学歴エリートとなる。例えば、その代表である戸水寛人（1861年生。法学博士、衆議院議員）と三宅雪嶺（1860年生。東京大学文学部哲学科卒、評論家、雑誌『日本人』創刊）は、共に河波有道の私塾で学んでいる⁹⁾。

井口済と関口開も、金沢中学校の教壇に立つ前後から自らの私塾で若者を集め、同中学校の廃校後も県「英学校」、啓明学校から石川県中学師範学校→石川県専門学校へ繋がる学校で教師を務め、幾多の俊才を中央に送り出す役割を果たした。例えば、北條時敬（1858年生。東京大学理学部数学科卒業。第四高等学校校長、東北帝国大学総長、学習院長。）、横地石太郎（1860年生）、中橋徳五郎（1861年生）、そして早川千吉郎（1862年生）はいずれも関口開の薫陶を受けている。

3 関口開と加賀藩の学問風土

ここで、関口開の業績が、加賀藩の「和算」の継承と新しい「洋算」の受容という点からどのように接続されていたのかみておこう。

関口は金沢の教育界に多大な貢献をした数学者であり、かつ教育者でもあったわけが、その基礎となった和算を加賀藩「数学師範算用者」である瀧川友直（秀蔵）に学んでいる。加賀藩の和算は、18世紀頃から北陸地方に伝わり、御算用者および藩校・明倫堂の算学師範の系譜から受け継がれてきたことがわかっている¹⁰⁾。関口の受けた和算は（その流派の一つで）瀧川流といい、御算用者（定番御歩の家格）であった瀧川有又（子龍）から友直（秀蔵）、そ

の後、善蔵（質直）と続く和算家にあたる。一方、関口が「洋算」の手ほどきを受けたのは戸倉伊八郎からである。戸倉は長州人で、江戸の高島秋帆から砲術と兵学を習い私塾を開いていたところ、1862（文久2）年、加賀藩に招かれ壮猶館および致遠館の教師になっていた。1869（明治2）年、「鉤深館」でも測量を教授している。「西洋算法の金澤に起こつたは、伊八郎を以て鼻祖とする」（『加能郷土辞彙』）とあるように、洋算は藩政期末期に加賀藩に伝えられた新しい学問であった。そして、この洋算を和算と融合させたのが関口開であったわけである。

では、なぜ関口がこの役割を担うことになったのか。周知のように、江戸期の数学をめぐるのは「商売ノ事トシ之ヲ度外ニ措ク」風潮が特に士分に強かった。「顧フニ、昔時武治ノ世、士人ト称スル者、専ラ体力ヲ重ンジ智力ヲ重ンセズ。儒者仏者昔空理ヲ務メテ実用ヲ務メズ、算数ノ事ニ至テハ之ヲ卑シムコト特ニ甚ダシク、視テ以テ商売ノ事トシ之ヲ度外ニ措クニ至レリ」（神田 1877）。そのため、加賀藩でも経理の実務を担うのは「御算用者」であり、その役目は「御歩（徒士）」のような下級武士が担い、算術を学ぶ者もまた同じ身分層（関口開も「御歩」の出身）の若者であった。ところが「和算」は、「ソロバン」のような実用数学に加え、「算額文化」にみられる点竄術や円理のような知的遊戯としての数学をも射程にしていたので、「優れた和算家なら、譯もなく、洋算の初歩を學び取ることが出来た」（小倉 1949, 16頁）という。測量学や天文学、航海術のような学問は洋書の翻訳と御雇外国人に頼るところ大であったが、数学を学問として日本の教育界に導入させ発展へ導いた功績は「和算」のユニークな進化の賜物であるといわれる。

明治十年代の金沢が数学分野における学歴エリートを多数輩出できたのは、旧加賀藩の「和算」の文化を継承し、これと「洋算」を融合させて近代数学への転換を図った関口開に負うところが大きいといえる。いいかえれば、旧藩の職制に位置づけられた御算用者の系譜と、中央から金沢に西欧の学問を伝えた外部人材とが、ちょうど関口開という人物と交叉することで、教育における「和算」から「洋算」へ移行が可能になったのである。

この成果を、藩政期の学問風土からの影響として一般化させることは可能かもしれない。近代化にともなう西欧科学の移入については、「為政者の側よりも寧ろ洋学者、民間の側により本格的に採上げられ、もり上げられ実践された」（内山・増田 1960）ことは度々指摘されたとおりである。本康（2004）は地域経済史の観点から、藩政期に金沢の職人たちによる「技術文化」の蓄積があったからこそ、蘭学者による天文学や理化学の成果を生み出すことができた指摘する。つまり、地元の実学者（技術者）と洋学者

(地域蘭学)の相互補完関係に、金沢における洋学発展の仕組みを解くカギがあるというのである。

小論では、関口開や河波有道らの業績の中にもこうした実学と洋学の相互補完関係をみることができた。河波の業績については先にみたとおりである。関口は藩校で洋学の手ほどきを受けただけで、遊学に出ることもなく金沢に居を構え、自ら設立した私塾で後進の指導にあたった。さらに、数少ない仲間と共に英書の翻訳に没頭した。高瀬(2011)によれば、『関口開先生小伝』(1919)で伝えられている彼の著作(翻訳書、解題書、問題集)は22冊に及び、1冊を除きすべて洋算書で、1870(明治3)年から1881(明治14)年の期間になされた仕事である。関口のような「地元定住型」の移動(しない)パターンは、他の9名にはなく珍しい。彼は石川県専門学校教諭であった1884(明治17)年に逝去したが、長年の教育活動の功績により(同年に亡くなった)井口済と共に文部省から顕彰されている。

4 明治維新「後」に金沢から去った教師たち

さて、ここまでの叙述から、藩政期の藩校から金沢中学校への連続性を「10名」の教師の系譜から明らかにしてきた。だが、近世教育と近代教育の接続を殊更強調することには慎重でありたい。なぜなら、廃藩置県後に壮猶館が中学東校へ改編された時点で、中学東校に残った人材と金沢から去った人材とに分かれてフィルタリングされているからである。つまり、「10名」はこの分岐の時点で金沢に残った人材だったわけである。では逆に「金沢に残らなかった教師たち」は誰だったのか、プロフィール上で「10名」との相違点をみておこう。

「金沢に残らなかった教師たち」は——結論を先にいえば——「英学」の教師を務めたキーパーソンたちである。「英学」は儒学や和算とは異なり、金沢では伝統がない上に蘭学に代わって初めて壮猶館で教授された学問であった。その背景もあり、壮猶館の廃止をきっかけに明治維新後まもなくして「英学」は、その担い手が去り、相応しい後継者を欠いてしまうことで低迷してしまう。金沢を去った洋学(英学)教師の代表として、三宅秀(1848年生)と佐野鼎(1831年生)を挙げておきたい。

まず、三宅秀は、江戸の蘭医の家に生まれ、第2回遣欧使節(池田使節団)にも随同行した英学者で、1867(慶応3)年、壮猶館に招聘されたが、1870(明治3)年、金沢を去り、大学東校(後の東京医学校、東京大学の前身)に出仕している(後、医学博士、帝国大学医科大学長)。佐野鼎は、駿河国富士郡の郷士の出身で、幕臣・秋山安房に仕え長崎海軍伝習所にも遊学経験のある「蘭式の兵學者」(『金沢市教育史稿』29頁)である。1857(安政4)年に加賀藩に「御異風格」として迎えられ「新流砲術師範方棟取

役」を務めた。1860(万延元)年の万延元年遣米使節に随行了たことで有名である。彼を評して岡林(1989)は、「この時期における洋学者の典型的な一人であり、しかもその先端にかなり近い位置にいたことは疑いない」と述べている。維新後、加賀藩士となり学政所係権少参事を務めているので学制改革に役割を果たしたようだが、「詳細は分かっていない」(『金沢市史 通史編3 近代』88頁)。そしてまもなく佐野は金沢を去り、東京で、1871(明治4)年、共立学校(現:開成中学校、開成高等学校)を創設している。

三宅秀と佐野鼎は共に(石川県ではない)他藩の出身者であり、こうした人材の移動パターンを「外部招聘→金沢から中央へ回帰型」と記しておく。

次に、加賀藩藩士でありながら維新後、中央政府に出仕した洋学者として関澤幸三郎(明清)(1843年生)をあげておく。関澤家は平士、父は馬廻組250石の立派な士分の家であった。関澤は壮猶館で蘭学を修め、文久年間に加賀藩の選抜によって江戸留学を果たし、1866(慶応2)年、薩摩藩士・新納竹之助(新納家は薩摩藩家老)のフランス留学に同行しロンドンに留学している。帰国後、三宅と共に壮猶館に招かれ、英学教授と英書翻訳に従事したが、1871年(明治4)年、藩主嫡子・前田利嗣に随行して再び渡英した後、新政府に出仕し、内務省、農商務省の官僚(水産官僚)として名を馳せることになる。

また、「移動」ではなく、維新の動乱で不運にも命を絶った教師として安達幸之助(1824年生)がいる。彼は、加賀藩・足輕身分の安達家の養子となり、1855(安政2)年、江戸の加賀藩邸に在勤する。村田蔵六(大村益次郎)に蘭学を学び、井口済にも漢学を学んでいる。1856(安政3)年、足輕小頭。1860(万延元)年には幕府の講武所で西洋兵学を教え、金沢に帰沢後、壮猶館で洋学を教え、大砲鑄造に従事した。彼の在任中、壮猶館の「洋学は安達幸之助の教員たりし時を以て最隆昌とし、私費を以て寄宿するもの五六十人に至れり」(『金沢市教育史稿』34頁)、と伝えられるほどの逸材であったが、京都に出て大村益次郎に用いられ、伏見兵学校で兵学と英学を教授していた頃の1869年(明治2)年、大村益次郎暗殺事件に巻き込まれ死去している。

以上4名、藩政期末に金沢に洋学(英学)をもたらし有意な業績を残した人材を取り上げた。死去した安達を除き、彼らのプロフィール上の特徴をあげれば、加賀藩の外部から招聘され登用された者(三宅、佐野)、あるいは、上級武士(平士)で藩主や他藩の家老クラスとより近い関係にあつて洋行の経験があった者(関澤)、となろう。彼らは、中央との緊密なネットワークを活かして洋行も経験して、学問に励み、その成果を金沢へもたらした。

だが、その志は中央へのチャンネルとチャンスへ向いていたのであろうか、明治維新を転機に東京の行政府に出仕したり、より深い学問を求めて大学校への進学を果たしたりして、金沢を去っていったのである。

山森（1966）は明治維新後の「英学」の不振について、その原因を壮猶館が廃されたことに帰して次のように述べている。「壮猶館を失った金沢は中学東校として若干の英学進歩に力めたが此れはほんの1ヶ年余であつて、英学の公校を失った金沢、七尾は残存元英学校教授連による英仏学校教育程度に止まつたのである。英学は頓に不振を極わめ、此れに変わつて洋数学が著るしく進歩発達を遂げるに至つたのである」（山森 1966）、と。この指摘は「英学」に相応しい教師を、明治維新後に失ったことを含意していたわけだ。

小論では山森に倣い、次のようにまとめておくこととする。壮猶館にもたらされた英学の種は、維新後、金沢で開花を待つまでには根を張ることができなかった。これに代わり、和算学者（関口開）や碩学（河波有道）のような地元金沢出身の教育者による粘り強い洋書翻訳の熱意が、周囲の協力者を巻き込み、実学や教育界へ知識を還流しようとするムーブメントの礎となったのである。

こうして「10名」についての第四の特徴として、出身地が（不明者を除き）いずれも金沢であり、しかも下級の武士身分出身である、という特徴を改めて確認することができる。

以上が、金沢中学校を巡ってその前後の時代で起こっていた「教師」という人材の「移動」であった。

5 まとめ

小論は、廃藩置県の後、すなわち1871（明治4）年以降に設立された初の県立中学校（「金沢中学校」）で教師を務めた人材の「移動」の観点から、近世教育の伝統と成果がどのように近代教育へ引き継がれていったのかについて考察した。

江戸期の藩校（「明倫堂」（文学校）と「壮猶館」（洋武学校）をはじめとする諸学校）で教師を務めた学者たちが、明治維新後の金沢藩（版籍奉還の1869（明治2）年から1871（明治4）年の廃藩置県までの期間）が設立した中学西校や中学東校においても、さらに、その後の石川県立の近代学校でも子弟教育に勤しみ、有為な人材を輩出する役割を果たした。彼らの多くは地元金沢の出身で江戸や大阪への遊学経験を経て金沢に帰郷してきた下級武士たちであった。小論での議論は、近世から近代教育への制度的な連続／不連続を問うてきた従来の教育史の視点とは異なる、人事的な連続性を明らかにできた。

加賀藩の学問を担った下級武士の学者たちは、近代学校の教師としても独自の学問を追究、深化させ、地元・金沢の教養文化や実学に関わるネットワークの中心として貢献したのである。

注

- (1) 国書刊行会編、1907、『新井白石全集 第六』所収「室新詩評」中の一節。新井白石（1657-1725）が、加賀藩に仕えていた儒学者・室鳩巢（1658-1734）に与えた書に「貴国は天下の書府に候へば」と綴った、と謂われている。なお、この言には白石流の皮肉が込められている。
- (2) 加賀藩は、1869（明治2）年の版籍奉還により金沢藩と改称し、1871（明治4）年の廃藩置県により、金沢の地は金沢県を経て石川県となった。なお、加賀、能登、越中、そして越前（一部）に属するそれぞれの郡の所属については異動があるが、ここでは金沢市の所属には無関係なので述べないこととする。
- (3) 神辺（1981）は、中学東校の変則専門科の課程が中央の大学南校の課程に類似していた点を指摘し、金沢藩が「中央の変化をかなり敏感に受け止めながら改革を進行したのがこの時期の金沢藩の学校であった。」と評価している。したがって、旧藩校との連続性よりも刷新性に光を当てようとする。曰く、「金沢藩の中学西校は旧明倫堂、経武館に拠ったとは言うものの開校に先立つ一か月余も前に明倫堂を閉鎖し、教員も一たん悉く解雇している。この点についてみれば中学西校は旧藩校の単なる改称でなく新たな中学校の建営であった」、と。
- (4) 廃藩後に藩校が県立に移管された例は他藩でも見られる。佐藤（2021）による東北地方の藩校を対象とした調査では、盛岡藩や山形藩もまたそうである。
- (5) 『金沢市教育史稿』257頁。なお、内田政風はその後、石川県参事、そして石川県令を1875（明治8）年まで務めた。
- (6) 加賀藩の組織は、①人持組頭－②人持組－③平士－④与力－⑤御歩（御徒士）－⑥足輕－⑦中間・小者に分類される。その人数は、①八家8人、②68人、③1202人、④291人、⑤432人+397人（御歩並）、⑥4000人とされる。（富田景周「帳秘藩臣録」による。1807（文化4）年頃の侍帳で石高および人名が記されている。）
- (7) 『石川県教育史』においては、幕末期の藩校・明倫堂で儒学を学んだ後、幕府の昌平黌へ留学、修了後、再び明倫堂の教員として迎ええられることが一つのパターンとして出来あがっていたと指摘し、そうした留学を果たした者の型を次の3つに分類している。①加賀藩において代々儒者の家柄にあり、昌平校に学んで学問の仕上をなすもの。いわば中央と地方との文教面でのパイプ役を果たした。②陪臣・小者などの下級武士出身ではあるが、その学すぐれており、抜擢され昌平校に派遣された者。③自らが志す学問の幅を広げるため、江戸・長崎に遊学し進取気鋭の学問風潮

を摂取し、他藩のものとの交遊を得る。特に幕末維新期の勤皇思想へと傾斜するものが多かった。また、同書は「また、昌平校ばかりでなく、自らの学問研鑽のため諸藩へ師を求めて遊学したものもあろうし、諸外国へ留学したものもあった」とも指摘している（『石川県教育史』第1巻、45-47頁）。

- (8) 徳富蘇峰『吉田松陰』より。続けて蘇峰は述べる。「養子の制は、位地と実力と顛倒しつつある封建社会に向って、幾分かその平衡を恢復せしむるの、もしくは不平均を甚しからざらしむるの効用ありしを。」と。
- (9) 三宅雪嶺は、金沢中学校廃校後にできた変則の仏語学校（後、英語学校）から愛知英語学校、東京開成学校、そして東京大学文学部（後の帝国大学文科大学）へと進んだ。戸水寛人は啓明学校で県費留学生に選抜されて帝国大学法科大学へ進んだ。
- (10) 田中・上垣（2012）は、18世紀になって北陸地方に伝わった和算の流派とその師弟関係の系譜を論じている。

引用および参考文献

- 今井一良，1978，「加賀英学の系譜：石川県啓明学校開設前後」『英学史研究』10，日本英学史学会，109-119頁。
- 稲垣忠彦，2002，「藩校における学習内容・方法の展開」『帝京大学文学部教育学科紀要』27，帝京大学文学部教育学科，1-22頁。
- 井上好人，2002，「石川県における旧制中学校教育機会：石川県専門学校から金沢一中へ」『金沢星稜大学論集』第36巻(2)，金沢星稜大学経済学会，167-175頁。
- 井上好人，2003，「金沢一中卒業生からみた旧加賀藩士族の社会移動」『教育社会学研究』第73集，日本教育社会学会，5-24頁。
- 石川県，1974，『石川県史 第四編』石川県図書館協会（昭和6年発行の復刻）。

- 石川県教育会金沢支会編，1982，『金沢市教育史稿』（日本教育史文献集成16），第一書房。
- 石川県教育史編さん委員会編，1974，『石川県教育史 第一巻』，石川県教育委員会。
- 金沢市史編さん委員会編，2006，『金沢市史 通史編 3 近代』金沢市。
- 神辺靖光，1981，「明治初期における藩立中学校」『国士舘大学文学部人文学会紀要』13，1-25頁。
- 神辺靖光，1988，「『藩治職制』にみる『学校』とその意義：松江藩の職制に即して」『日本の教育史学』31(0)，4-18頁。
- 神田孝平，1877，「東京数学会社雑誌題言」『東京数学会社雑誌』第1号。
- 文部省総務局編，1890，『日本教育史資料 式』富山房。
- 本康宏史，2004，「加賀の技術文化と地域蘭学」『国立歴史民俗博物館研究報告』116，179-207頁。
- 小倉金之助，1949，『明治時代の数学』，理学社。
- 佐藤愛未，2021，「明治維新期における藩校運営の移行過程に関する一考察：東北地方の藩校を中心に」『紀要』57，郡山女子大学，260-247頁。
- 高瀬正仁，2011，「西洋近代の数学と日本：関口開と藤澤利喜太郎」『数学・計算機科学研究所報（第21回数学史シンポジウム報告集）』津田塾大学数学・計算機科学研究所，222-243頁。
- 高瀬正仁，2013，「関口開と石川県加賀の数学」『数学通信』18(1)，日本数学会，5-24頁。
- 田中伸明・上垣渉，2012，「北陸地方における和算の伝統」『三重大学教育学部研究紀要（自然科学・人文科学・社会科学・教育科学）』63巻，三重大学教育学部，103-109頁。
- 内山克己・増田史郎亮，1960，「明治初中期実学主義消長の史的考察：其の一」『教育科学研究報告』6，1-12頁。
- 山森専吉，1966，「加賀藩の英学」山森専吉（金沢大学附属図書館中央図書館蔵）。